

# 潟語

り(二十五)

文・小西 一三  
絵・小西 由紀子

## 氷下漁のこと

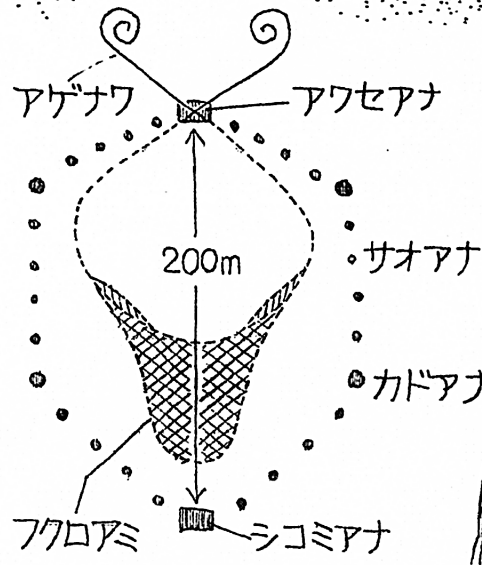
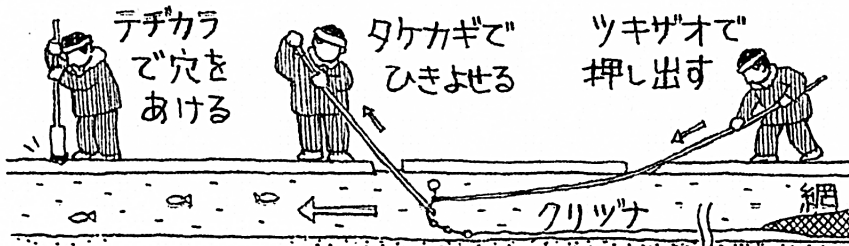
塩口の石川喜代志さん(大正八年生まれ)のお宅は代々、半農半漁。喜代志さんも農業をしながら、さまざまな漁をしてきました。また、喜代志さんは天王町の「潟船保存会」の元会長で、会の発足にも尽力なさった方です。今回は冬の潟の風物詩、氷下漁についてお聞きしました。

自分で編んだ「ジャケツセーター」を着てな

ひと通り潟の漁はしてみだども、氷下漁、あれは危険な漁だった。俺がああ漁を手伝ったのは二十歳の頃。やー、容易でねがったなあ、あれは。元気のいい若勢が北海道のニシン場に行ってしまった後の漁で、「あとふき網」って呼ばれていた。春先だから氷の状態も不安定で、行く時は塩口から出て、帰りは羽立から帰ってくることもあった。

俺は氷の下に網を通す「棹使い」をやった。ゴム手袋?そんなモノなの使わせてもらえねがった。素手よ、素手。最初の頃は冷めでがったなあー。それでも仕事をすれば、だんだんぬぐくなってきたもんだ。もたもたしてれば「何やってる!!」ってどなられてな。

当時は「ジャケツセーター」を着てる人も多かった。ハイカラな名前だども、これは漁師が自分で編んだもんだ。編み針と毛糸を買ってきてな。二号針、三号針って



石川喜代志さん

太さの違う針があつてよ。編み方も毛糸を二本合わせれば二本織り、三本合わせれば三本織りって言うてたな。秋になれば仲間が集まって編んだもんだども、ゴツゴツした太い指でえぐ編んだもんだ。まったく編まね人もいだども、上手な人も随分いだもんだつたなあ。ジャケツセーターは汗をかいでもムレねもんだがら、春先の漁にはいがつたもんだ。  
ああ漁を一週間も続ければ、黄色いシヨンベンが出てきた。それだけ重労働だったということだべな。